



## 野村萬齋 構成・演出『マクベス』

# シェイクスピア×和楽器の舞台、 音楽監修は藤原道山

**没** 後400年を経ても未だ輝きを失わないシェイクスピアの作品と、和楽器。そんな刺激的な組合せがまもなく、世田谷パブリックシアターにて実現します。

当劇場の芸術監督・野村萬齋は、2002年の芸術監督就任以来、シェイクスピアを同時代に息づく舞台作品として演出することに果敢に取り組んできました。

その代表作といえるのが、シェイクスピアの四大悲劇のひとつに数えられる『マクベス』(2010年初演、13年・14年再演)です。マクベスとマクベス夫人、3人の魔女という、5人の登場人物に焦点を絞り、大胆に構成・演出を手掛けました。

13年には、日本文化の粋を結集すべく、能・狂言のミニマルな演出方法を随所に取り入れ、「和」の美しさを引き出した新たな『マクベス』として、ニューヨークとソウルで上演。さらに14年にはルーマニア・シビウ国際演劇祭とパリにて公演を行い、各地で熱狂的に迎えられました。



『マクベス』野村萬齋、鈴木砂羽  
撮影：英台信司

国内外にて再演を重ねて進化・深化を繰り返してきた本作は、今年6月、マクベス夫人に鈴木砂羽を迎えて装い新たに魅ります。そして今回は、和楽器の生演奏が登場します。音楽監修を務めるのは、音楽ユニット「KOBUDO -古武道-」でも活躍する尺八演奏家・藤原道山。『敦—山月記・名人伝—』『スーパー歌舞伎II ワンピース』などの音楽を手掛けた藤原が、マクベス夫妻の悲劇に新たな息吹をふきこみます。

芸術監督・野村萬齋が、節目の50歳を迎える2016年にリクリエイトする新生『マクベス』。どうぞご期待ください。

### 紹介してくれたのは 世田谷パブリックシアター 広報 宇都宮 萌さん

「劇場は広場」という言葉が入口に刻まれた当劇場では、同時代を生きる人々が集い、明日への糧となるものを持ち帰っていただけるような演劇・コンテンポラリーダンス作品を創造・上演しています。今後の作品に、野村萬齋構成・演出『マクベス』(6月15日～22日 世田谷パブリックシアター 出演:野村萬齋 鈴木砂羽ほか)、フィリップ・リドリール作『レディエント・パーミン』(7月シアターラム 演出:白井晃 出演:高橋一生 吉高由里子 キムラ緑子)など。問い合わせ:☎5432-1515



## ジャン＝ミシェル・バスキア《SEE》 力強く即興的な作品は “ビ・バップ”に例えられる

80 年代初頭、ニューヨークのアート・シーンに彗星のごとく登場したジャン＝ミシェル・バスキア(1960－88年)。彼もまた音楽と関係が深い。

バスキアは、プエルトリコ系移民の母とハイチ系移民の父の間に生まれたアフリカン・アメリカン。ストリートのグラフィティに新進のギャラリストがいち早く注目し、評判は一気に世界中に広まり、アンディー・ウォーホルとの合作も話題となった。

バスキアの作品はどれも即興的で、モダン・ジャズのサクソ奏者、チャーリー・パーカーのビ・バップに例えられる。「自分の絵は子どもの絵みたいで、適当に描いていると思っている人がいるかもしれないが、考えないで引いている線は、一本もない(全部、考え尽して描いている)」とバスキアは語る。

活動は絵画にとどまらず、ロック・バンド、GRAYにも参加。グループ名の由来は、彼が少年時代に母からもらった本、『グレイの

ジャン＝ミシェル・バスキア《SEE》 1985年 アクリル、油彩、ミクストメディア、カンヴァス 218.5×193.0cm 世田谷美術館 蔵 © The Estate of Jean-Michel Basquiat/ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015 G0241

解剖学』(ヘンリー・グレイが著した解剖学の古典)に因む。

この作品《SEE》にもまた、自ら描いた解剖図のコピーがコラージュされている。白い壁と向き合って座る黒人は、鏡の中のおのれを凝視する作者自身のようでもある。名声と創作の狭間で苦闘したバスキアは、ドラッグの過剰摂取により早すぎる生涯を閉じた。残された作品は自己と世界との戦いの爪跡でもあった。



GRAY『Shades Of...』(CD) 2010年(Plush Safe Records)  
バスキアの演奏を収録した貴重な一枚。あのヴィンセント・ギャロもかつてバンドに在籍し、ジュリアン・シュナーベル監督の映画「バスキア」(1996年)にカメオ出演している。

### 紹介してくれたのは

世田谷美術館美術課長／学芸員 矢野 進さん  
担当した主な展覧会は、「瀧口修造と武満徹展」、「花森安治と『暮しの手帖』展」、「植草甚一／マイ・フェイヴァリット・シングス」、「東宝スタジオ展 映画＝創造の現場」など。

音楽と本

の 一冊

## 上橋菜穂子『夢の守り人』

# 音と言葉の力、 生と死の狭間の歌

**作** 家・上橋菜穂子さんによる「守(も)り人シリーズ」は、『精霊の守り人』を皮切りに全12巻が刊行され、ベストセラーとなりました。短槍使いの女用心棒バルサと、皇子であるがゆえに苦悩し、運命に翻弄される少年チャグム。ふたりの主人公を軸に、精霊と人の世界が交錯するファンタジーの大作です。3巻目となる本書は、シリーズ中特異な輝きを放ちます。

本書では、異界に咲く<花>に夢を囚われた人々を、呪術師見習いタンダ(バルサの幼なじみ)とトロガイ(彼の師)が助け出します。普段は脇役の2人ですが、連作では唯一登場する音楽家(放浪の歌手・ユグノ)とともに、呪術と音(歌声)の力でこの世と異界との不協和を取り除くのです。

作者は、「素朴で、古くから人々が語ってきた『語り物』の骨格をもつがゆえに、子どもでも楽しめる物語。それでいて、大人が読んだときには、大人であるがゆえの発見があつて楽しめる物語」を目指してい



「夢の守り人」上橋菜穂子著・二木真希子画 借成社  
他に、同社の軽装版や新潮社の文庫版あり

るそうですが、それはまるで、ユグノが歌う「語りつぎ歌」のようなものかもしれません。ユグノの歌声は、聴くものの身体と心に共鳴し、現実から夢へ、生から死へと誘う力を持っています。音と言葉の持つ底知れぬ世界を、1冊のファンタジーで訪れてみるのはいかがでしょうか？

**紹介してくれたのは** 世田谷文学館 学芸課 佐野 晃一郎さん

世田谷文学館では4/23(土)～7/3(日)、「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」を開催。国際アンデルセン賞を受賞した作家の代表作「精霊の守り人」シリーズ関連資料、文化人類学の研究ノートなどを展示。ドラマやアニメ、漫画化された作品の魅力に迫ります。

詳細は問い合わせを。☎5374-9111